

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.14（2013年10月号）◆

いつまでも秋冷の候といいがたい毎日ですが皆さまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか。このニュースレターとともに、「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> とあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【20世紀メディア研究所主催：第79回20世紀メディア研究会】（10月5日午後2時半～5時半）

・中野綾子（早稲田大学大学院教育学研究科・日本学術振興会特別研究員）「読書の動員-戦時下の推薦図書制度をめぐって」文部省および日本出版文化協会の推薦図書の調査分析により、戦時下の読書統制について明らかにし、「良書」概念の内実を検討した。

・華京碩（龍谷大学社会学研究科）「満州国時代の日本人経営中国語新聞と菊池貞二について」満州国成立後の日本人経営による中国語新聞の実態を調査し、経営者の来歴や言動の分析を通じ、外部勢力、とくに軍勢力影響下の中国語新聞および新聞人の関東軍、満州国官僚との関連等を考察した。

・島田大輔（早稲田大学大学院社会科学部研究科）「反蒋派と『大阪毎日新聞』—中原大戦における日本新聞の中立性について」1930年4月から11月初頭にかけて蒋介石率いる国民党中央軍と反蒋介石派の間で展開された中国内戦時の史料と新聞社の論調の変化、大毎偽電事件の分析を通じ、日中関係史研究における新聞のありようを考察した。

※なお、研究会当日に配布された資料レジュメは会員ホームページにアップされます。ご参照ください。（閲覧は『Intelligence』の購読会員に限定されています。）

●次回の20世紀メディア研究会は、11月9日(土)で、山本英政さん、百瀬孝さん、長與進さんがご報告の予定です。その後は、12月7日(土)、1月25日(土)、3月29日(土)を予定しております。なお、ご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jpまで、メールにてご一報下さい。

【新着情報】

『近代日本博覧会資料集成』植民地博覧会2 満洲（津金澤聰廣／山本武利 監修、川崎賢子 編・解説、国書刊行会、2013年9月）が刊行されました。

【今月のコラム—文楽座組合結成について】

「GHQ 占領期における「文楽」の変容」『Intelligence』vol.13にも書き、4月27日の75回研究会「GHQ 占領政策と文楽」においても発表したことだが、占領期の文楽は歌舞伎とはまた異なる形で GHQ の政策の影響下にあった。本拠地大阪と東京、地方における観客の関心の相違。天覧上演、掾位授与などの権威付けの流れ。郷土芸能から伝統芸能、古典

芸術への概念の編み替え。そのなかで一面では関係者の労働環境の改善、民主化、近代化の兆しでありつつ、その半面で文楽の分裂をもたらすことになった組合結成。日本映画演劇労働組合大阪支部文楽座分会は、東宝争議を指導した日映演の分会だがやみくもにつぶされることはなく、むしろ占領軍の助言を受けていたとの言い伝えがある。だが、歌舞伎の上演禁止演目の解除をあたかも一手に引き受けたかのように一時喧伝されたフォービアン・パワーズの実際が米国公文書館の占領関係資料調査によってあきらかにされたように、文楽座の労働条件改善に尽くした占領軍の某氏についても資料なしには言及せずに来た。内山美樹子氏『文楽・歌舞伎 日本古典芸能と現代』（岩波書店）には「GHQ 労働課のオーバクレ少佐」と名がみえるが、1949年4月『文学』の座談会「文楽の伝統について-文楽座組合の活動をめぐって」の桐竹亀三発言によれば「軍政部」（固有名なし）のだれかということになっている。昨年来、労働課、CIE、CCDの資料を気にかけてみていたが、このたび、大阪軍政部の労働問題のリポートに該当するものを見いだした。1948年5月31日付の月報 JOHN J O'BUCKLEY 少佐名で労使関係の問題報告の項に文楽座で組合を組織しようとしたものに解雇の圧力がかけられたが、経営陣を呼び出したところ解雇の意図は否定した。また労働者側には組合について助言を行い、組合は登録され、団体交渉協約の遂行が試みられている、と。大阪地区の占領期資料は豊富に残されているといいがたく、文楽、宝塚など上方の芸能の調査は容易ではないのだが、ようやく文楽座組合結成と占領政策との関係の一端を示す文書に出会えた。

（文責・川崎賢子）